
残酷屋 手助け編

神の息

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残酷屋 手助け編

【Nコード】

N1416E

【作者名】

神の息

【あらすじ】

普通の日々を過ごす男、道雄。道雄の前に現れた残酷屋と名乗る男、刈田。刈田に死を告知された道雄だったが、刈田は道雄を助けることに……。超短編小説

「眠い。」

朝、すずめがチュンチュンと鳴く声が聞こえる街の中。その中に建つ4階建てのマンション。

そのマンションの4階の3号室。ベッドの上で寝ぼけた顔で布団の上で1人で呟く男性。

みちた みちお
満田道雄。25歳。自動車会社の勤務員。

真面目な性格で、しかも明るく人付き合いの良い社員。

「今日は休みなのに・・・、何故こんなに早く起きてしまったんだろうか・・・。はぁ・・・。」

ベッドから立ち上がり、パンをトースターに入れる。そんな普通の日。

「今日もいい日になりそう・・・だなー。」

伸びをしながら独りで喋る。いつも通りだ。

「ピンポン」

こんな朝早くの部屋に響き渡るには少し似合わない音。

「こんな朝早くに誰だよ・・・。まだパジャマなのに。」

とたとたとドアの方に早歩きで辿り着き、ゆつくりドアを開ける。

「朝早くにすいません。私、残酷屋店員の、刈田寿之と申します。」
かつたとしゆき
笑顔で残酷屋と名乗る若い男。

「残酷屋？なんだそれは。新しい宗教か？」

からかわれたと思った道雄はからかい返す様に言った。

「宗教ではありません。まず話を聞いて頂きたいのですが・・・。」

「部屋は無理だぞ。入らせる気は無い。」

「じゃあ玄関こゝろでいいです。」

スマイルを絶やさないう刈田。朝っぱらからスーツを着ている。

「話って、なんだ？」

「はい、とりあえず落ち着いて聞いて下さいね。」

突然、刈田の表情が変わり、真剣な顔で話し始めた。

「あなたは今日の午前11時、友人に遊びに誘われる事になっています。この午前11時があなたの人生の『終わり始め』です。」
そう言いながらポケットから1枚の紙を出した。

「これは残酷屋の店主が決めた終わり方です。あなたは乗り物にぶつかって死ぬ。という事になってます。」

考え込んだ顔で話を聞く道雄。

「状況が理解できん。とりあえずもう1度、簡潔にたのむ。」

「はい、あなたは今日、交通事故で死にます。」

「……」

あまりにも信じ難い話に硬直する道雄。

「え、ええと、じゃあ、お前は俺の最期を見送りに来たと？」
動揺しながら問う。

「いえ、私はあなたが生きれるように手助けをしにきました。本当は最期を告知して、見送るのが私達の仕事なのですが、今回限り、あなただけ、チャンスがあります。それは、店主が用意した交通事故の全てから逃げ切ることです。今日の午前11時から正午まで逃げ切れば、あなたの勝ちです。そうすればあなたは死ななくて済みます。」

「……」

道雄の手はガクガクと震えていた。

「い、今は何時だ。」

時計を確認する。10時58分。

「では……」

「まもなくスタートつか。」

吹っ切れた道雄は柔軟を始めた。

玄関には自分の心臓の音と時計の音だけが聞こえる。

「プルルルル」

電話が鳴った。がちやりと受話器を取る。

「もしもし。」

「おう、道雄。今日さ、ボーリング行かね？」

「うん、解った。今から行く。」

集合場所もしらないのに電話を切った。11時2分。

「マンションに居たらどうなるんだ？」

道雄は問う。

「えーと、マンションに大型バスが突っ込んできます。それが元で火事が起きます。」

「じゃあまずはここから抜け出すか。」

たたたた。と階段をおりて、駐車場に辿り着いた。

「あ・・・」

大型バスがマンションの方に向かってきた。しかし、そのまま通り過ぎて行く。

「まず1つ目は回避できましたね。」

「おう、じゃあこの駐車場は？」

「はい、えー、ここに居ると、普通の車にひかれます。」

そう聞いた瞬間、道雄は走り出した。駐車場から抜け、スーパーに向かっていった。

その後、1台の車が駐車場に入ってきた。

「2つ目もクリアです。」

道雄に着いていきながら、刈田は言う。

「このスーパーは？」

「車が突っ込んできて、このスーパーの1部が崩壊、それに巻き込まれます。」

チクショウ。といったような顔でスーパーを出て行った。道雄の背後からは、建物の崩れる音と、人の悲鳴が聞こえてきた。道雄はビルに入った。そして上の方の階に上った。

「こ・・・こ・・・は？」

流石に息切れし始めた道雄。

「ここでは、飛行機が突っ込んできます。」

「それはまたたいそうな。」

上ってきた階段を下りて、いったん止まり、

「この近くに海がある。そこなら助かるか？」
と問う。

「はい。流石に船までは来ませんね。」

そう聞くととたんに道雄は走り出した。 11時50分。

「これなら助かりそうだな。」

道雄は少しだけ笑みを浮かべた。

「よし、着いたぞ！」

喜びながら海の方へ駆けていく。

「やりましたね！」

刈田も微笑んだ。

「ブルルルル。」

車の音。

「たたたたたたた。」

二人の足音。

「ガゴツツ」

鈍い音。

海の目の前。 11時55分。

「クア、ガハツ、ゲホツ」

血まみれの体に、血まみれの道。

道雄の意識はほとんど無くなっていた。その道雄の小さな視界の中で刈田はニヤニヤと笑っていた。

「覚えてますよね、私は残酷屋です。本当の仕事はあなたを残酷な死に導く事です。」

道雄の耳はかすれていく。刈田の言葉も聞き取りにくい。

「さようなら、お客様。」

刈田は笑顔でそう言った。

（後書き）

初めての短編です。
文才は無いですが、
できれば感想お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1416e/>

残酷屋 手助け編

2010年10月15日14時41分発行